

## 7 外部投稿

### 台風通過に伴い発生する急潮に関する研究

松山 優治、井桁 庸介、北出 裕二郎、石戸谷 博範

台風通過に伴う急潮の発生機構を解明する目的で、相模湾をモデルとして数値実験を行った。台風8818号を事例とした風応力を与えた、台風による強い北風の連吹により、房総半島東岸で強い沿岸流を伴う孤立沿岸捕捉波が発生した。沿岸捕捉波は、陸棚が急激に狭くなる房総半島南東岸の勝浦沖で、順圧的な構造から傾圧的な構造へと性質を変化させると共に、沿岸近くで表層の沿岸流を強めることが判明した。この強い沿岸流を伴う沿岸捕捉波が相模湾へと伝播し、急潮を引き起こしたと考えられる。

月刊海洋 号外 No.40、H17.4

### アユ冷水病マイクロカプセルワクチンの研究開発

原 日出夫

アユ冷水病の予防対策として経口ワクチンが研究されていたが、胃液の作用により効果が低下することが問題であった。胃で溶けず腸で解ける性質のマイクロカプセルにワクチンを内包することに成功し、投与量、投与期間及びアジュバントの添加割合の検討を行い、抗体価の上昇及び死亡率の低減効果を得るまでの研究経過を報告した。

水産世界 第54巻 第4号、H17.4

### 伊豆諸島周辺海域におけるキンメダイ *Beryx splendens* 雌の成熟

秋元 清治（神奈川県水産総合研究センター）、久保島 康子（神奈川県環境農政部）、三谷 勇（神奈川県水産総合研究センター）、斎藤 真美（日本NUS）

産卵期のキンメダイ雌の性成熟について生殖腺の組織学的観察および生殖腺指数（G S I）から検討した。1993年7～8月に伊豆諸島周辺海域において採集した281試料（尾叉長23.3 - 49.0cm）の成熟度は7段階に分けられた。G S Iは成熟度のよい指標値となっていた。生物学的最小形およびF L 50は尾叉長でそれぞれ31.8cmおよび32.5cmであった。また、7月に採集された伊豆半島沖試料は八丈島沖試料と比べて成熟が進んでおり、漁場間の成熟度に違いがあることが示唆された。

日本水産学会誌 第71巻第3号

### 谷戸の代表選手 ホトケドジョウ

勝呂 尚之

ホトケドジョウは湧水環境を代表する淡水魚である。全国的に減少し、環境省絶滅危惧種に指定された。内水面試験場では種苗生産手法の開発に成功し、系統保存を各水系別に実施している。また、場内の水辺ビオトープ・谷戸池で復元試験を行い、成長や季節移動、繁殖生態等を解明した。川崎市生田緑地、万福寺、犬蔵、藤沢市遠藤、伊勢原市上堤農業用水路等、県内各地で本種の保全活動が盛んで、その主体は市民団体である。本種の生息域を保全・復元することは、湧水エリアの保全に繋がり、最終的には河川および海域を含めた水域生態系を守ることになる。

希少淡水魚の現在と未来 積極的保全のシナリオ（信山社）、50-60、H17.7

### 忘れられた里山の魚 ゼニタナゴ

勝呂 尚之

本県におけるゼニタナゴの最後の生息地は横浜市内のため池であった。しかし、環境悪化と外来種のタイリクバラタナゴの進入により現在は自然水域から姿を消した。内水面試験場では絶滅直前に採集したわずかな親魚から増殖に成功。人工受精による増殖手法と自然産卵による増殖手法の2本立てで研究を行ってきたが、大量生産の技術開発には成功していない。現在は場内の水

辺ビオトープ・生態試験池にゼニタナゴ復元エリアを造成し、復元研究も実施している。

希少淡水魚の現在と未来 積極的保全のシナリオ(信山社)、133-141、H17.7

#### 神奈川県事例 地域とともに歩む県水試

勝呂 尚之

内水面試験場はアユやワカサギ等、重要産業種の他に、絶滅危惧種の保護・復元研究も行なっている。内容は希少淡水魚の分布調査、種苗生産の技術開発、水辺ビオトープでの保全等で、最終目標は希少淡水魚をシンボルとして内水面生態系を保全・復元することにある。現在の試験場は業界相手だけでなく、河川管理者、市民団体等とも連携しながら、水域環境保全・復元の旗振り役として、研究開発や事業の実施に取り組み、活躍することが期待されている。

希少淡水魚の現在と未来 積極的保全のシナリオ(信山社)、355-361、H17.7

#### 谷戸の救世主「ホトケドジョウ」

勝呂 尚之

昔から横浜や川崎の谷戸には「たんぼのハゼ」と呼ばれるホトケドジョウがたくさん生息していた。現在は多くの谷戸が開発され、生息地は激減し、環境省の絶滅危惧種となった。試験場では種苗生産に成功、各水系の遺伝子を保全しながら、生息地の保全・復元を図っている。復元は各地域の行政や市民団体との連携して、水辺ビオトープの造成や調査を行なっている他、イベントや観察会を開催している。絶滅危惧種の保護には地域住民の協力が不可欠である。

生田緑地の谷戸とホトケドジョウを守る会会報、2005年・No.1、H17.7

#### ワカサギの成長に伴う胸腺の発達と胸腺に及ぼす飼育水温の影響

長谷川 大輔(東海大)、小野 信一(東海大)、原 日出夫

ワカサギの胸腺は棒状または洋梨形を呈し、鰓腔の背側後部に左右一対で存在し、上皮細胞に包まれた胸腺実質はリンパ球様細胞で満たされていた。成長とともにその体積は増加し、9月で最大となった以降退縮し、翌年3月にはほとんど消失していた。また、通常の飼育水温(平均17.3)より約3℃高い水温で飼育した場合9月の胸腺体積は通常の半分以下であり、その後の退縮は顕著であった。

東海大学紀要海洋学部 第3巻 第1号 H17.7

#### 相模湾沿岸域の環境の特徴

山田 佳昭・松下 訓(国土環境株)

1960年代後半からの相模湾沿岸域での調査結果を振り返り、水質の変化を検討した。陸域から負荷される窒素は横ばい、リンは減少しているものの、海域の栄養塩類レベルに顕著な変化は認められない。透明度の低下や内部生産によるプランクトンの増加など徐々にではあるが沿岸環境が変化してきている可能性がある。

水産海洋研究 第69巻 第3号 H17.8

#### 急潮被害ゼロを目指す定置網漁具開発の現状

石戸谷 博範

漁場の流況頻度分布や水中カメラ調査による海底状況と回流水槽実験により得た側張張力値等のデータから、定置網の設置方向、側張強度、台浮子浮力を決定する。設置後は、網交叉、錨転倒等の有無を水中カメラで確認する。日常管理は、網地や側張の汚れを早期に清掃し投影面積の増加を防ぐ。水中カメラ調査により漁具安全診断を1年毎に行い、網類の消耗状況を把握し、消耗部分は早期交換を行う。急潮情報発令に際しては、箱網等撤去を行うとともに網類の付着物の

清掃を励行する。長期管理は、台のフラセ、三角等側張り危険部位のワイヤー点検、連結部のシャックル、コッキリの点検を定期的に行う。ワイヤーロープ等は確実に老朽化するため、少なくとも7～8年以内で交換を進めて行く。また、定置網全体の使用年数等を管理する漁場カルテを作成し、交換時期を見逃さない心がけも大切である。

ていち108、H17.8

#### 定置網の新技术と将来展望 相模湾における定置網防災技術等の実践と経営向上

石戸谷 博範、高橋 征人

急潮は定置網を流失させ、その損失は莫大な金額に達する。神奈川県では、回流水槽等により研究を進め、急潮対策等の新技术をモデル定置網設計の際に活用した。その成果は漁獲量・金額の旧型比1.7倍増、従事者の若返り、鮮度保持の進展、漁具管理の徹底等に繋がり、経営の安定に役立った。一方、漁具防災研究と実践が進み、モデル網に用いた側張り設計手法や急潮予報発令時の対策等をまとめた「急潮から定置網を守るマニュアル」の普及に加えて、調査船うしおによる定置網安全対策調査を県内各漁場で実施し、事故原因の早期発見と予防策の研究を進めている。急潮被害による休業日数と被害金額の減少をこの研究の成果が現れ始めた1998年(モデル網設置)前後で比較すると、休業日数は24%減、被害金額は53%減し、直接の経済効果が現れている。

水産海洋研究 H17.8

#### 城ヶ島におけるアワビ漁獲量・漁獲努力量および種苗放流の経年変化

今井 利為・滝口 直之

1969年から2003年までの城ヶ島におけるクロ、メガイ、マダカの種別漁獲量、覗突と素潜りの漁法別漁獲量、努力量、C P U Eの経年変化、種別年別種苗放流量、漁業者の年齢別による漁獲量、漁獲物中の人工種苗由来貝(混獲率)の経年変化、人工種苗由来の累積漁獲金額をまとめた。

水産増殖研究会報第35号、H17.9

#### メダカと桑原鬼柳農業用水路

勝呂 尚之

メダカは環境省の絶滅危惧種となる位、全国的に減少している。桑原鬼柳用水路は本県最後のメダカ生息地であり、生物多様性の高い貴重な水域でもある。日本のメダカは種としては1種類であるが、地域ごとにそれぞれ適応進化しており、遺伝的に異なった集団である地域系統群を形成している。そのため、その保護は地域系統群ごとに行なう必要がある。現在、本エリアに道路が計画されているが、行政・専門家・市民がお互いに協力し、解決策を見出していこう。

小田原市桑原・鬼柳地区のメダカ等の動植物保全に係る協議会だより、No.1、H17.9

#### 神奈川県における栽培漁業の現状と課題

今井 利為

栽培漁業と養殖業の定義を述べ、神奈川県における栽培漁業の成果と課題を紹介した。神奈川県におけるマダイ種苗放流効果及びマダイ釣り人から協力金を納入してもらう制度についての経緯と現状及びアワビサザエの放流事業と経済効果を述べた。さらに、ホシガレイの親魚養成にあたって深層海水での飼育が有効である可能性との見解を述べた。

フードリサーチ Vol.604 H17.10

#### 環境水を用いた生分解性プラスチックの生分解性評価

村山 小枝子、青木 信義、廣川 隆彦、石戸谷 博範、作中 宏、山中 敦好、山野 尚子  
生分解性プラスチックを用いて、環境水(河川水、海水)による分解性の評価と分解菌の定量

を行った。分解性はデンプン/ポリカプロラクトン、分解菌数はポリヒドロキシブチレート/バリレートが優位で、この結果は土壌の場合と類似した。

神奈川県産業技術総合研究所研究報告、H17.10

河原で魚に親しむー水の中をのぞいて見ようー

勝呂 尚之

相模川は本県を代表する河川で生物も多い豊かな川であった。最近は在来種の減少、非在来種の増加など様々な問題が顕在化している。相模川の厚木付近で見られる26種の魚類について、分布、生態および県内河川での現況を写真とともに紹介した。

相模川の生き物に親しむ、厚木市郷土資料館、H17.11

ミヤコタナゴの保護・復元

勝呂 尚之

本県におけるミヤコタナゴは横浜市のため池を最後に自然水域から姿を消した。当時、内水面試験場の前身である淡水魚増殖試験場へ緊急避難し、種苗生産の技術開発に成功、毎年、継代飼育を行なってきた。現在は、恒温器で浮出まで管理する人工受精による増殖方法と二枚貝を用いた自然産卵による増殖手法の2本立てで、大量生産が可能になっている。また、場内の生態試験池や横浜市内のため池に放流し、復元研究を実施しているが、毎年、繁殖稚魚が確認されている。

第1回全国タナゴ・サミット報告書、H17.12

ワカサギ

井塚 隆

水産増養殖システム淡水魚編(隆島史夫・村井衛 編)においてワカサギの増養殖手法について分筆を担当した。本種の生物学的特徴、漁業生産量、増養殖環境、種苗特性、孵化管理方法、種苗量産法などについて概説した。また、新たな種卵生産・管理法として、芦之湖漁業協同組合が取り組んでいる水槽内自然産卵法とふ化器を用いた増殖事業を紹介した。これらの知見から、本種の増殖手法は水面規模や水域環境など湖沼の現状に合わせて選択するのが望ましいと提言した。

水産増養殖システム2 淡水魚(恒星社厚生閣) H17.12

タナゴ類(ミヤコタナゴ・ゼニタナゴ)

勝呂 尚之

タナゴ類の生物学的特徴、種苗生産手法、育成方法などを、春産卵を代表してミヤコタナゴ、秋産卵を代表してゼニタナゴで解説した。ミヤコタナゴは二枚貝を使用せず、恒温器で浮出まで管理する人工受精による増殖方法とカワシンジュガイ等の二枚貝を用いた自然産卵による増殖手法の技術開発に成功し、大量生産が可能となっている。現在は場内の生態試験池や横浜市内のため池に展開し復元研究を実施中。ゼニタナゴは人工受精と自然産卵の増殖手法の相方ともに安定した大量生産技術は確立していない。

水産増養殖システム 淡水魚(恒星社厚生閣)、171-183、H17.12

市民との協働によるアマモ場の再生

工藤 孝浩

本県において2003年から本格的に取り組んだ市民との協働によるアマモ場の再生活動を取り上げて一般向けに紹介した。特に、NPOに委託しての既存資料に照らした造成適地選定調査や、市民参加による大規模な種苗生産のシステム、陸上水槽内で種子から苗を育成させて株移植造成に用いる方法などは、全国にも例のない本県オリジナルの方法として紹介した。

ミトコンドリア・シトクロムb遺伝子の塩基配列に基づく日本産およびニューカレドニア産フウセンキンメおよびキンメダイの同定について

秋元 清治(神奈川県水産総合研究センター)、糸井 史朗(日大生物資源)、瀬崎 啓次郎(日冷検)、Philippe Borsa(IRD - Genetique des Populations)、渡部 終五(東大院農)

日本産フウセンキンメ7個体およびキンメダイ45個体のmtDNAシトクロムb遺伝子307bpの塩基配列を決定し、それぞれ11および3ハプロタイプを得た。これらを既報のニューカレドニア産キンメダイA種およびW種と最大節約法の系統樹で比較したところ、フウセンキンメとW種、およびキンメダイとA種は各単系統となり、両種はいずれも大きな地理的分布を示すことが明らかとなった。日本産個体のハプロタイプのいくつかはニューカレドニア産のものと同じで、遺伝子フローが大海洋全域に渡る規模で生じていることが示された。

Fisheries Science 第72巻第1号 H18.1

相模湾における春漁期のカタクチイワシシラスの漁況予測

船木 修、八角 直道(茨城水試)

相模湾におけるシラスの春漁期(3~6月)中のカタクチイワシシラス漁獲量は、カタクチイワシ大型成魚産卵準備群資源量指数(茨城水試)と非常に高い相関があり、この指数を基に精度の高い予測を行うことが出来る。なお、この関係式が使えるのは、黒潮が概ね蛇行型あるいは離岸型のN型の場合である。

黒潮の資源海洋研究第7号 H18.3

アマモ場・浅海域の再生に向けた東京湾岸自治体の広域連携構想

工藤 孝浩

東京湾においては1990年代から、本県においては2000年からのアマモ場再生活動の歴史があり、本県で安定生産できるようになったアマモ種苗は、遺伝的攪乱を生じさせずに東京湾内湾部の造成に用いることができる事が判明した。そこで、本県が生産した種苗や造成の技術と経験を湾岸各自治体に提供し、自治体間の連携を深めながら湾全体のアマモ場再生をコーディネートする役割回りへと転じたい。そして将来、アマモ場再生の連携組織を母胎として、東京湾の環境再生を担うオーソリティーへと発展させたい。

第三回横浜・海の森づくりフォーラム - 協働で行う横浜の海辺づくり現状とこれから -  
H18.3

三崎魚市場に水揚げされた魚類 -

山田 和彦(相模湾海洋生物研究会)・工藤 孝浩

筆者らは、相模湾の魚類相を明らかにするために1984年以降、三崎魚市場に水揚げされた魚類の調査を継続し、これまでに562種を記録した(山田・工藤, 2005)。本報では、2004年11月から2005年10月までの1年間に合計23回の調査を行い、新たに水揚げが確認されたダルマオコゼ、シマフグ、シッポウフグについて記載した。

神奈川県自然誌資料(県立生命の星・地球博物館)第27号 H18.3

秦野市今泉湧水池におけるカラスガイの確認

谷 芳生・田代 輝夫(以上秦野市都市経済部公園みどり課)・手塚 真理(秦野市くずはの家)・勝呂 尚之

秦野市今泉湧水池において環境省準絶滅危惧種のカラスガイを2個体と多数の貝殻を採集した。

本池は以前に養殖池が存在しており、周辺水域での記録も全くないことから、養殖魚に混入していた可能性が高い。本池では他にコイ、フナ類、オオクチバス、モツゴ、メダカ、ドジョウ、ヨシノボリ類の生息が確認されている。

平塚市博物館研究報告「自然と文化」、No.29、35-37、H17.3

#### 飼育水温および飼育密度がアユの胸腺の発達に与える影響

原 日出夫、山本 充孝（滋賀県農政水産部）、村木 誠一（富山県農林水産部）、  
三輪 理（水研セ養殖研）

飼育水温および飼育密度がアユの胸腺の発達に与える影響について、琵琶湖産、富山県人工産および神奈川県人工産の計3つの由来の異なるアユを用いて検討した。その結果、アユの胸腺の発達は低水温飼育（約15℃）と比べ高水温飼育（約20℃）により抑制されることが確認された。しかし、0.58～10.95kg/m<sup>3</sup>（試験終了時）の飼育密度は胸腺の発達に影響を与えなかった。

日本水産学会誌 第72巻 第2号 H18.3

#### 相模湾における最近の定置網漁業資源の特徴

木下 淳司

1990年から2003年にかけてウマヅラハギ、マイワシ主体からさば類、マアジ主体に魚種組成が大きく変化した。CPUEは1.3 t前後で安定して推移した。相模湾の主要魚種の資源は、我が国太平洋岸を回遊する資源の一部であることが、両者の資源の変動傾向が似かよっていることから示された。しかしマアジは相模湾周辺で生まれ育ったローカル群の増加による資源動向の変化が伺われた。最後に相模湾の漁場特性を活かした定置網漁業について論議した。

水産海洋研究 第69巻 第3号（2005） p. 216～219

#### 黒潮大蛇行期における相模湾の定置網漁況

木下 淳司・小境 昭彦（静岡水試伊豆分場）

黒潮大蛇行期における相模湾の漁況は、1987年と2004・05年は好漁、1990年は不漁であり明瞭な関係は見られなかった。資源水準の変動、ならびに黒潮流路は大蛇行期間中も絶えず変化すること等がこの要因であろう。1964年の大蛇行に伴い異常冷水が発生し、各地で極めて不漁となった。相模湾の漁獲量は前年比26%減少したものの、経年変動の範囲内であった。相模湾は安定した漁獲が期待できる、優れた定置網漁場であると考えられた。

水産海洋研究（印刷中）

#### 砂浜海岸に設置した人工リーフへのカジメ移植と群落の拡大

木下 淳司・山本 章太郎・石黒 雄一・山本 貴一

砂浜域に設置した人工リーフへ、約26,000本のカジメを移植したところ、その場所から群落が広範囲に拡大した。拡大速度は48m/年以内であり、遊走子が濃密に拡散する距離と一致した。移植から5～6年で天端を除く人工リーフ全体に、被度50-100%のカジメ群落が形成された。カジメ群落の密度と現存量は三浦半島の天然群落に近い値であった。カジメの遊走子の拡散方向、幼体の発生および生残は、流動や水温等海況条件と関わりがあることが示唆された。

水産工学（印刷中：第43巻第2号）

Abundance and biomass of Scyphomedusae, Aurelia aurita and Chrysaora melanaster, and Ctenophora, Bolinopsis Mikado, with estimates of their feeding impact on zooplankton in Tokyo Bay, Japan

Junji Kinoshita, Juro Hiromi (Nihon University) and Yoshiaki Yamada

The abundance of a scyphomedusae, Aurelia aurita and Chrysaora melanaster, and a ctenophore, Bolinopsis

mikado, in Tokyo Bay was investigated from 1995 to 1997. *Aurelia aurita* was the most dominant gelatinous species and feeding impact was extremely high. *C. melanaster* was scarce over the survey period. *B. mikado* biomass and feeding impact increased from autumn to winter, which corresponded to periods of decreased *A. aurita* abundance. Consequently, the trophic role of gelatinous zooplankton as predators in Tokyo Bay is considered important throughout the year.

Journal of Oceanography (in press)

## 8 研修生の受け入れ

研 修 生	期 間	人 数	受 入 先	研 修 内 容
日本大学生物資源科学部	H17.4 ~ H18.3	5名	内水面試験場	卒業研究 (アユ冷水病・ギバチ復元研究等)
日本大学生物資源科学部	H17.4 ~ H18.3 のうち2週間	10名	内水面試験場	インターンシップ研修
生田緑地の谷戸とホトケドジョウを守る会	H17.5 ~ H18.3	1名	内水面試験場	絶滅危惧種の復元
東京海洋大学水産学部	H17.7 ~ H18.3	1名	内水面試験場	卒業研究 (ミヤコタナゴ復元研究)
東洋大学生命科学部	H 17.9	3名	企画経営部	3年次実務研修
県立海老名高校	H 17.9	1名	内水面試験場	インターンシップ研修
県立三崎水産高校	H17.12	12名	栽培技術部	漁業生産科実習
東京環境工科専門学校	H18.1	1名	内水面試験場	インターンシップ研修

## 9 業績発表会

### 第20回 神奈川県水産技術センター業績発表会プログラム

- 第1日目 平成17年7月19日(火) 会場 神奈川県水産技術センター 1階 水産セミナー室  
三浦市三崎町城ヶ島養老子 TEL. 046-882-2311
- 第2日目 平成17年7月20日(水) 会場 神奈川県産業技術総合研究所 2階 講義室  
海老名市下今泉705-1 TEL. 046-236-1500

---

#### 第 1 日 目

---

- 10:00 開 会  
10:05 水産技術センター所長挨拶  
10:10 進行説明

発表( : 発表者)  
講演番号 開始～終了 演題(発表タイトル) 発表者( ; 講演者)

「海や魚の性質を理解して魚をうまく捕まえよう。(漁海況)」

- 101 10:15～10:30 関東・東海海域における沿岸海況の短期予報研究について 樋田史郎
- 102 10:30～10:45 海況とキンメダイ漁の関係 秋元清治
- 「魚介類やその住みかを絶やさないうまく調べ、考えよう。(資源・漁場環境)」
- 103 10:45～11:00 シヤコalima幼生の東京湾からの流出 清水詢道
- 104 11:00～11:15 「関東近海のマサバについて」の総集編編纂 岡部久
- 105 11:15～11:30 マイワシの耳石輪紋の日周性 船木修・片山知史(中央水研)
- 106 11:30～11:45 神奈川県における遊漁船のマダイ釣獲量の推定とその経年変化 一色竜也

11:45～12:00 .....総合質疑(101～106に関して).....

---

#### 昼 食

---

- 107 13:00～13:15 市民との協働によるアマモ場再生試験(平成16年度) 工藤孝浩・沼田武
- 108 13:15～13:30 2004年秋季に発生したアイゴによる人工リーフのカジメの食害 木下淳司
- 109 13:30～13:45 海洋肥沃化装置“拓海”の効果調査 山田佳昭・田島良博
- 「つくり育てる漁業で魚介類を増やそう。(栽培・養殖技術)」
- 110 13:45～14:00 ヒラメの体色に関する親魚の影響 長谷川理・金子栄一・木村トヨ  
・熊谷民夫
- 111 14:00～14:15 ヒラメ種苗生産の中間育成における簡易かつ確実性を追求したシステムの開発 山田敦・一色竜也・星野茂・中尾満・星野昇・浜田信行・県栽培協会
- 112 14:15～14:30 ホシガレイ小型種苗の放流(1998年50mm放流群の回収状況を主に) 中村良成・山田敦・照井方舟  
・浜田信行・中尾満・星野昇
- 113 14:30～14:45 城ヶ島におけるアワビ漁獲量(漁獲努力量および種苗放流の経年変化) 今井利為・滝口直之(水産課)

14:45～15:00 .....総合質疑(107～113に関して).....

---

#### 休 憩

---



「漁具や魚の住みかを改良し、創造しよう（水産工学）」

- 114 15:10～15:25 定置網（モデル網）の側張りワイヤー強度試験結果 石戸谷博範・高橋征人(小田原市漁業協同組合)  
115 15:25～15:40 模型網実験による小型底びき網の網成りについて 石黒雄一

「新鮮で良質な水産物を食卓へ届けよう。（水産経済・利用加工）」

- 116 15:40～15:55 カタクチイワシの利用について 菊池康司  
117 15:55～16:10 神奈川県における都市漁村交流の展開について（みうら漁協通り矢支所の事例から） 清水顕太郎・みうら漁協通り矢支所

「漁師さんと一緒に取り組む活力ある漁業（普及指導）」

- 118 16:10～16:25 松輪イカ釣部会が実施した酸素発生器を用いたイカ活魚輸送の普及指導について 荻野隆太・仲手川恒(水産課)・みうら漁協松輪支所イカ釣部会  
119 16:25～16:40 ノリ陸上採苗に向けて！ - 金沢支所の中核的漁業者協業体の指導について - 鎌滝裕文・横浜市漁協金沢支所 金沢海苔グループ  
120 16:40～16:55 西湘地区における普及指導の考え方 中川研  
16:55～17:10 .....総合質疑（114～120に関して）.....

17:10 閉会

---

## 第 2 日 目

---

内水面

- 13:30 開会  
13:35 水産技術センター所長挨拶  
13:45 進行説明

発表（：発表者）

「健康な魚をたくさん育て増やそう。（内水面増養殖）」

- 201 13:50～14:05 芦ノ湖におけるワカサギ採卵の新手法 - 井塚隆○・大場基夫\*・橘川宗彦\*  
- 自然産卵に適した収容親魚の密度と性比について - (\* 芦ノ湖漁業協同組合)  
202 14:05～14:20 神奈川県で発生したコイヘルペスウイルス病 原日出夫  
203 14:20～14:35 アユ冷水病経口ワクチンにおけるアジュバントの添加割合 原日出夫  
204 14:35～14:50 継代数の異なる人工産アユの種苗差 - 相川英明○・中川研・蓑宮敦・山本裕康

「川や湖、そこに住む生物について考えよう。（内水面環境）」

- 205 14:50～15:05 早川におけるアユの環境収容力Part 2 中川研○・蓑宮敦・山本裕康  
206 15:05～15:20 道保川（相模川水系）に移入されたドンコの生息状況 蓑宮敦○・勝呂尚之・中川研・山本裕康  
207 15:20～15:35 生態試験池におけるギバチの生態について 勝呂尚之

---

休 憩

---

15:50～16:30 .....総合質疑（201～207に関して）.....

16:30 閉会

## 10 シンポジウム

「漁村ルネッサンス2005」 - 海業でひらく漁村の未来を語るシンポジウム -

開催日	平成17年11月12日(土) 午後1時から5時
場 所	東京海洋大学海洋科学部
共 催	東京海洋大学社会連携推進共同研究センター、海業研究会
後 援	水産庁・東京海洋大学水産産学連携協力会
内 容	海業とは、海や景観や文化をはじめとするさまざまな地域資源を活用して展開される漁村地域の新しい「なりわい」として捉え、漁村地域での新しい取り組みの実態を紹介しつつ、新しい漁業・漁村の姿を一緒に模索していく。
開会あいさつ	高井睦雄(東京海洋大学学長)
事例報告	海業発祥の地の“今” 小川砂郎(水産課) 新たな海業の展開 栗山義幸(横須賀市東部漁協)、鎌滝裕文(企画経営部) よそ者と浜の協働 松田 猛(ノアグループ代表) 里海体験活動 田中克哲(ふるさと東京を考える実行委員会) 八丈島の女性起業 小栗知江子(八丈島漁協連合女性部) 関いずみ(財団法人 漁港漁場漁村技術研究所)

### パネルディスカッション

司会進行 関いずみ

パネリスト

川口 真(北海道標津町水産課・商工観光課)

金萬智男(NPO法人里海の会)

工藤貴史(東京海洋大学)

玉置泰司(独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所)

富田 宏(株式会社漁村計画研究所)

渡辺好明(首相補佐官・郵政民営化準備室長・元農林水産事務次官)

コメンテーター

婁 小波(東京海洋大学)

## 11 平成17年度予算

## (1) 予算総括表

(単位：千円)

科 目	平成17年度	財 源 の 内 訳			平成18年度
		国庫支出金	そ の 他	一般財源	
水産技術センター費 水産業振興費	731,157	114,658	(使手) 91 (財) 24,503 (諸) 34,081 (県債) 333,000	224,824	259,761

## (2) 予算内訳表

科 目	平成17年度	平成18年度
1 水産技術センター費	721,437	235,568
(1) 維持運営費	130,189	133,712
ア 水産技術センター費	130,189	133,712
(2) 試験研究費	98,484	94,476
ア 経常試験研究費	94,334	93,676
(ア) 一般研究費	47,136	34,200
(イ) 一般課題研究費	0	5,700
(ウ) 一般助成研究費	2,600	0
(エ) 受託研究費	31,598	50,776
(オ) 魚礁効果調査事業費	13,000	3,000
イ 特定試験研究費	4,150	800
(ア) 重点課題研究費	4,150	800
(3) 水産業改良普及指導費	2,400	2,130
(ア) 水産業改良普及活動促進費	1,200	1,030
(イ) 漁業のいない手育成費	1,200	1,100
(4) 栽培漁業施設事業費	14,600	5,250
(ア) 種苗量産技術開発事業費	12,420	5,250
(イ) 栽培漁業施設整備費	2,180	0
(5) 漁業調査船建造費 *	475,764	0
ア 漁業調査船建造費 *	475,764	0
2 水産業振興費	9,720	24,193
(1) 海業推進事業費	2,000	1,800
ア 魚価向上対策事業費 *	2,000	1,800
(2) 漁場環境保全対策費	3,120	18,233
ア 漁場環境保全対策費	3,120	2,233
イ 漁場環境調査事業費	0	16,000
(3) 栽培漁業振興事業費	4,600	4,160
ア 栽培漁業放流技術開発事業費	2,000	2,160
イ 水産資源培養管理推進対策事業費 *	2,200	2,000
ウ まだい資源増大促進事業費 *	400	0

\* 水産課等で執行されるものを含む。

12 職員配置（平成18年3月31日現在）

組 織	氏 名	分 掌 事 務	事務 吏員	技術 吏員	技能 吏員	計
水産技術センター所長	岡 彬	所の総括		1		1
副所長（兼）管理部長	船澤 良二	所長の事務代理、管理部の総括	1			1
管理課長	岡本 武志	管理課の総括 漁業無線通信施設の運営及び維持 管理、漁業無線の指導に関するこ と	6	7		13
船舶課長	星野 哲	船舶課の総括	1	1		2
江の島丸船長	奥村 弘幸	江の島丸の総括		15		15
企画経営部長	長谷川 保	試験研究の企画調整、漁業経営・ 流通・加工技術の調査研究、漁業 情報・漁業技術の調査研究・水産 業普及活動に関すること		8		8
資源環境部長	高田啓一郎	漁業環境の調査研究、資源生態・ 漁況の予報の調査研究、資源管理 方法の開発研究に関すること		9		9
栽培技術部長	今井 利為	水産動植物の増養殖、生態の試験 研究、種苗の生産及び放流の研究 開発に関すること		7	7	14
相模湾試験場長	川原 浩	場の総括		10		10
次長	宇佐美 健	事務の総括（兼）	(4)			(4)
内水面試験場長	作中 宏	場の総括	1	7	1	9
合 計			(4) 9	65	8	(4)82

（ ）は兼務職員数